

(5) G・エリオット風のイギリス道徳（「或る反時代的人間の偵察行」の5）

イギリスでは、「キリスト教の神」から離れることによって、なお一層「キリスト教道徳」を固持しなければならないと考えられている。これは「イギリス的首尾一貫性」であり、この「エリオット風の道徳小姑たち(die Moral-Weiblein à la Eliot)」を悪く取ろうとは思わない。イギリスでは「神学からの解放」は「道徳狂信家」となることを意味する。

これに対して、われわれの場合は事情が異なる。すなわち、「キリスト教信仰」を放棄することは、「キリスト教道徳」を捨て去ることである。キリスト教は「一つの体系」であり、「神への信仰」を抜き去るならば、「全体」が崩壊する。キリスト教の前提は、「神のみ」が「人間にとって何が善であり、何が悪であるかを知っている」ということである。それゆえにこそ、その「神」を人間は信じるのである。「キリスト教道徳」は「命令」であり、その「起源」は「超越的」である。それは批判の彼岸にある。したがって、「キリスト教道徳」は「神」が「真理」である場合にのみ「真理」である。

以上のことから、イギリス人が「善と悪」とを「直観的に(intuitive)」に知っていると思いつながら、キリスト教を「道徳の保証」として必要ないと思っているのなら、それこそ「キリスト教的価値判断の支配の帰結」であり、この「支配の強さと深さ」の表現に過ぎない。そこでは「イギリス道徳の起源」は忘れ去られているのである。

(6) 冷淡で多産な物書き・ジョルジュ・サンド（「或る反時代的人間の偵察行」の6）

ジョルジュ・サンドの『一旅行者の手紙』の最初の方を読んだが、ルソーから由来するすべてのものと同じく「贗で作為的で大仰」である。この「多彩な壁紙風の文体」も「賤民の野心」も堪えられない。最悪のものは「男らしさや騷の悪い少年たち風」の「女の媚態」である。それでいて、この「いやらしい女流芸術家」は、いかに「冷淡」であったことか。彼女は「多産な物書きの牝牛」であり、悪い意味での「ドイツ的なもの」をもっている。

(7) 「体験しようとして体験すること」（「或る反時代的人間の偵察行」の7）

「観察するために観察しないこと！」。これをやると「誤った光学」、「藪にらみ」、「何か無理強いされたもの、誇張されたもの」となる。これは「体験しようとして体験すること」であり、上手くいくことはない。「体験」においては「自分へ眼を向けて」はならず、その場合はいずれも「悪い目つき」になる。「生まれながらの画家」は「自然に従って」仕事はしない。彼は彼の「本能」に、すなわち、彼の「暗室写真機(camera obscura)」に、「事件」や「自然」や「体験されたこと」の「選別と表現」を委ねる。「自然は偶然である」。これに反して「自然に従った研究」とは「最悪の徴候」であり、「卑屈、衰弱、宿命論」である。「あるがままのものを見ること(Sehen, was ist)」は「反芸術家的人間、事実的人間」に属する。